



今、私たち教員に求められていることは

子供たちを取り巻く社会は大きく変化しています。
今、私たち教員に求められていることは何なのでしょう。

「教えることは 学ぶことである
学ぶことは 深く生きようと願うことである」(教學一如)

子供たちと共に学び、深く生きる。南北 600km のステージで、私たち教員にはその喜びが与えられています。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通じて主体的・対話的で深い学びを実現することが、子供たちだけでなく、「新たな教員の学びの姿」として教員にも求められています。

子供の学びと教員の学びは「相似形」とも言われています。「学ぶ」ことを楽しいと思える教員と一緒にいてこそ、子供たちの学びは豊かになる、幸せにつながる。そう信じています。



教特法

「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない」とあります。
第21条「研修」をチェック！

←「教育公務員特例法」



育成指標

教員としてのキャリアステージに応じて求められている資質があり、県では「かごしま県教員等育成指標」としてまとめています。

←「かごしま県教員等育成指標」

【令和5年4月（全面改訂）】

Ⅱ

「学習者主体の授業」の必要性

～主体的・対話的で深い学びを実現するために～

Ⅰ 子供たちにどのような資質・能力を育成すればよいですか

Answer

学習指導要領では、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むことが求められています。そのため、全ての教科等において、資質・能力の三つの柱である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」をバランスよく育成していく必要があります。

- 私たち教員は、学校教育目標の実現に向けて、子供たちに育成する資質・能力を校内で共有し、具体化の手立てを教育課程に反映し、意図的・計画的に実施、評価、改善していく必要があります。
- その際、子供たちや地域の実態を踏まえた上で、例えば教育DXや生徒指導、特別支援教育の視点などで有機的に関連付けながら、総合的・包括的に運営していくカリキュラム・マネジメントが重要です。
- また、教育の目的について、その法的根拠を理解しておくことも重要です。教育基本法に掲げられている教育の目的についても、下の二次元コードから確認しておきましょう。

学びに向かう力、人間性等

どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」を
総合的に捉えて構造化

「学びに向かう力、人間性等」が高まることで、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の定着や伸びも相乗的・総合的に高くなると考えられます。

知識及び技能

何を理解しているか、何ができるか

思考力、判断力、表現力等

理解していること・できることをどう使うか

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び

対話的な学び

子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び

深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び



教育基本法についても確認しておきましょう。
第1条「教育の目的」もチェック！

← 「教育基本法」



学校教育法についても確認しておきましょう。
第30条第2項とも関連！

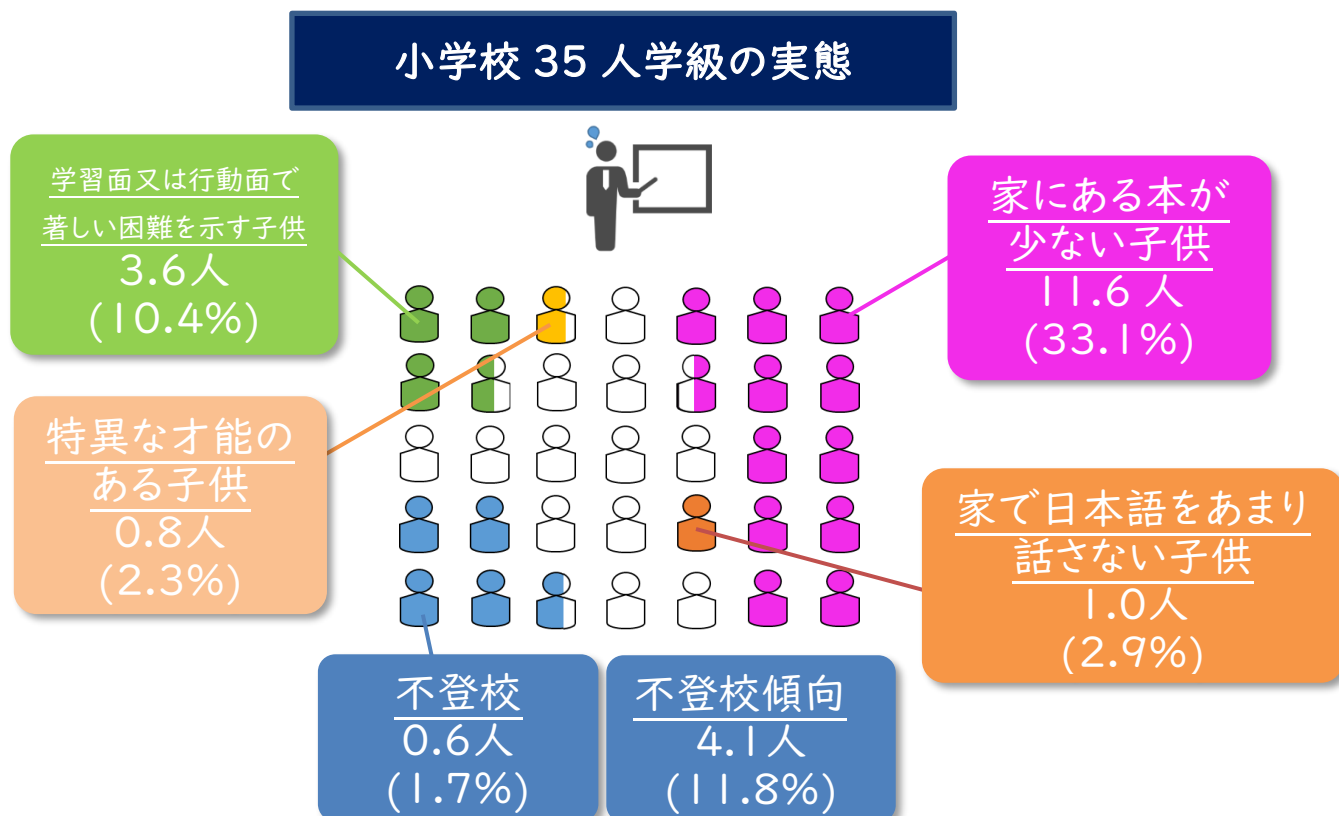
← 「学校教育法」

2 子供たちの資質・能力を育成するためには何が求められていますか

Answer

「学習者主体の授業」によって「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組を推進することです。

- これからは、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」、感染症の拡大など先行き不透明で予測困難な時代が到来するとされており、変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の頭文字を取って「VUCA」の時代とも言われています。
- このように学校を取り巻く環境が大きく変化する中で、令和5年6月に「第4期教育振興基本計画」が閣議決定され、今後の教育政策に関する総括的な基本方針として、
 - ・「2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」
 - ・「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の2つのコンセプトが掲げられ、教育関係者には、その実現に向けた取組が求められています。
- その実現に向けて大きな役割を果たすのが「令和の日本型学校教育」の実現です。令和3年答申においては、目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」とされています。
- 一方、下の図から分かるとおり、子供たちの実態は時代の変化に応じて大きく変化しており、多様になっています。
- このような状況においては、教員による一律・一斉・一方向の指導だけでは限界があり、全ての子供たちの可能性を引き出すことは困難であると考えられます。
- このようなことから、子供たち一人一人の理解度や認知の特性、興味・関心等を踏まえた「個別最適な学び」と、それらの学びが孤立することがないように「協働的な学び」を一体的に充実させることが求められています。そうした学びの根底には「学習者主体」であることが当然に求められます。
- 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが、持続可能な社会の創り手に必要な資質・能力の育成につながり、ひいては、ウェルビーイングの向上に資すると考えます。



(出典) 文部科学省「義務教育の在り方ワーキンググループ中間まとめ参考資料」【令和6年2月22日】を基に作成。

3 鹿児島県の子供たちの学力や学習状況の現状はどうなっていますか

Answer

令和6年度「全国学力・学習状況調査」の結果から、小学校においては全国平均正答数とほぼ同等で、中学校においては全国平均正答数をやや下回っていますが、差が縮まってきた傾向にあり、「知識・技能」、「思考・判断・表現」の観点においては、おおむね改善傾向にある状況です。

一方、「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができているか」という自己調整力に関する項目や、「自分にはよいところがあると思うか」という自己肯定感に関する項目が低いことなど、「学びに向かう力、人間性等」に関する調査において依然として課題が継続しており、「学習者主体の授業」が必要であることが分かります。

【各教科の平均正答数，平均正答率（小学校）】

※ 令和6年度「全国学力・学習状況調査
鹿児島県結果分析」から抜粋

	国 語		算 数	
	鹿児島県	全 国	鹿児島県	全 国
令和6年度	9.6 / 14問 (69%)	9.5 / 14問 (67.7%)	10.0 / 16問 (62%)	10.1 / 16問 (63.4%)
【参考】 令和5年度	9.4 / 14問 (67%)	9.4 / 14問 (67.2%)	9.8 / 16問 (61%)	10.0 / 16問 (62.5%)

【各教科の平均正答数，平均正答率（中学校）】

	国 語		数 学	
	鹿児島県	全 国	鹿児島県	全 国
令和6年度	8.4 / 15問 (56%)	8.7 / 15問 (58.1%)	8.0 / 16問 (50%)	8.4 / 16問 (52.5%)
【参考】 令和5年度	10.5 / 15問 (70%)	10.5 / 15問 (69.8%)	7.2 / 15問 (48%)	7.6 / 15問 (51.0%)

【児童生徒質問紙調査から】

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合（％）

質問項目		小学校			中学校		
		県平均	全国平均	差	県平均	全国平均	差
分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている。 【自己調整力】	R6	29.8	30.3	-0.5	26.8	28.2	-1.4
授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。 【主体的な学び】	R5	28.1	30.5	-2.4	28.0	30.4	-2.4
	R6	27.6	29.5	-1.9	24.1	27.2	-3.1
授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていた。 【個別最適な学び】	R5	39.4	37.3	2.1	20.2	22.6	-2.4
	R6	36.0	34.4	1.6	21.8	24.9	-3.1
国語の授業の内容はよく分かる。	R5	39.4	40.4	-1.0	26.7	30.4	-3.7
	R6	36.6	39.2	-2.6	27.8	32.0	-4.2
算数(数学)の授業の内容はよく分かる。	R5	44.8	45.2	-0.4	33.8	33.9	-0.1
	R6	45.6	44.9	0.7	32.5	35.1	-2.6
自分によりよいところがあると思う。 【自己肯定感】	R5	35.5	42.6	-7.1	30.9	37.2	-6.3
	R6	36.8	43.4	-6.6	36.0	40.4	-4.4



全国学力・学習状況調査から
子供の実態が分かります。

←鹿児島県教育委員会

「全国学力・学習状況調査鹿児島県結果分析」



鹿児島学力・学習状況調査の
分析結果も確認しましょう。

←鹿児島県教育委員会

「鹿児島学力・学習状況調査報告書」

(旧鹿児島学習定着度調査)

年度当初に，学校教育目標（①）や目指す子供像（②）を確認しましょう。

また，校内研修等において，自校の子供たちの姿（③）を振り返り，育成したい資質・能力（④）や目指す授業像（⑤）について語り合い，観を交流しましょう。

① 学校教育目標

② 目指す子供像

③ 自校の子供たちの姿

④ 育成したい資質・能力

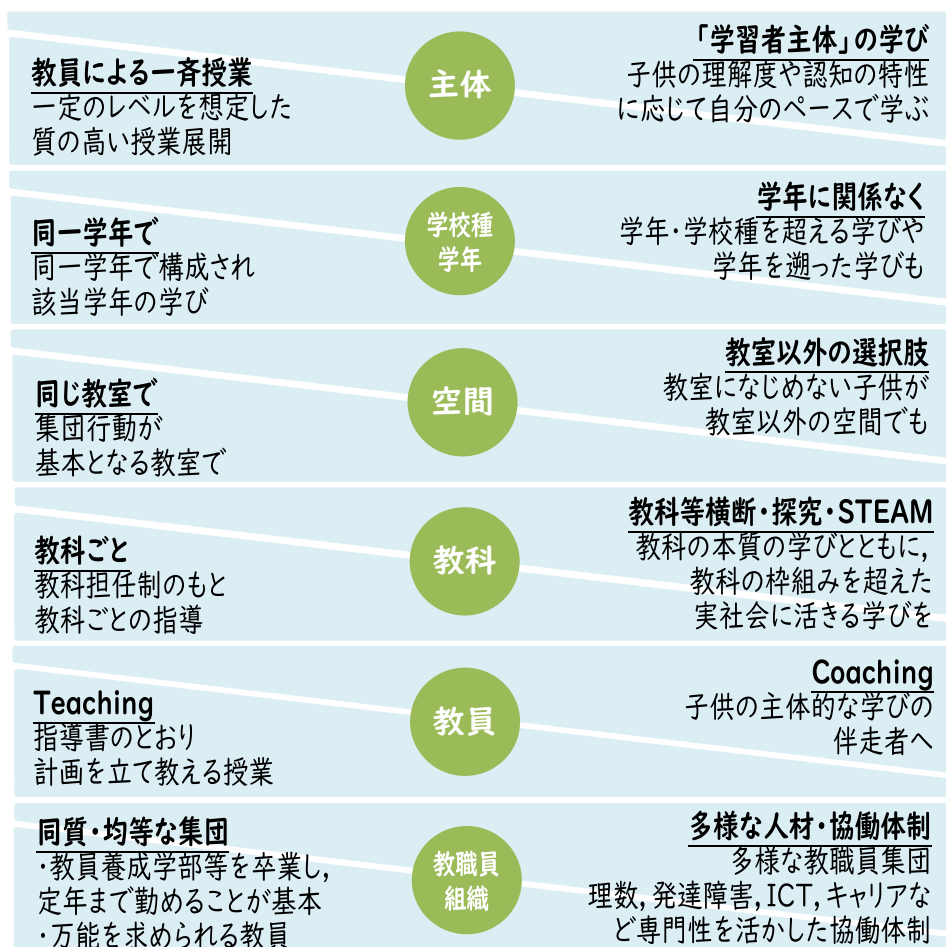
⑤ 目指す授業像

4 「学習者主体の授業」を実現するにはどのような考えが必要ですか

Answer

一律・一斉・一方向のみによる授業から脱却し、子供に委ねる場面とのバランスを踏まえた単元計画をデザインした上で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指すことが大切です。

- 「一律」の対義語としては「多様」や「ばらばら」などが、そして「一斉」の対義語としては「別々」や「個々に」といったものが挙げられます。また、「一方向」の対義語としては「双方向」、「相互的」などが挙げられます。
- これらを踏まえて考えると、一律・一斉・一方向のみによる授業からの脱却とは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に行われる授業ではないかと考えられます。
- それでは、教員主導の授業のみでは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現することは難しいのでしょうか。
- これまでも、教員の不断の努力により、例え教員主導であっても、子供が生き生きと学ぶ事例はたくさんあったと考えられます。しかし、その中で、学級にいる多様な全ての子供が本当に満足する授業になっていたといえるのでしょうか。
- もっと自分が興味あることについて調べてみたい。もっと考える時間が欲しい。もっと友達と対話を重ねたい。そんな子供の願いとは裏腹に、教員が選んだ教材で、教員が設定した時間で、教員が提案した学習形態のみで授業が進められてきてはいないのでしょうか。
- 「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に行われる授業では、子供が主体となって興味・関心に応じて学習方法や内容を選択・決定していく場面も必要となります。
- これからの教員に求められることは、教科等の特性や子供の実態に応じて「教員主導」と「学習者主体」のバランスを見極めて単元計画をデザインしていくことであり、教材研究を重ねることが重要になります。



(出典)「[Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ](#)(内閣府 総合科学技術・イノベーション会議資料【令和4年6月2日】)」を基に作成。